



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	朝鮮人「満州」移民のライフヒストリー（生活史）に関する研究：移民体験者たちへのインタビューを手掛かりに【論文内容及び審査の要旨】
Author(s)	朴，仁哲
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第12056号
Issue Date	2015-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60479
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	PIA0_RENZHE_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（教育学）

氏名 朴仁哲

朝鮮人「満州」移民のライフヒストリー（生活史）に関する研究 ——移民体験者たちへのインタビューを手掛かりに——

本論文は朝鮮人「満州」移民のライフヒストリー（生活史）に関する研究である。中国東北地域には、かつて朝鮮半島から移住した朝鮮人「満州」移民体験者（以下移民体験者）たちが現在も居住している。移民体験者たちは植民地朝鮮時代、および「満州国」時代を生き抜いた人々である。移民体験者たちは過去の歴史上の出来事としてある一方、過去の移民体験を引きずりながら今日もなお生き続けている。いわば、移民体験者たちの個人史には、日本帝国主義による支配の痕跡が生々しく刻まれているのである。

20 世紀前半の日本による朝鮮半島支配や中国侵略は半世紀以上前のことであるが、現在でもこの過去の出来事が東アジア問題として存在し、当事者たちよりは子孫の世代で世代間の認識の乖離が増大しつつある。本論文は植民地と戦争という歴史を生き抜いた移民体験者たちのライフヒストリー（生活史）に着目し、過去の日本と中国、そして日本と朝鮮半島との複雑な関係を背景にした朝鮮人「満州」移民の問題を考察する。本研究では主に移民体験者たちが生きてきた個人史と社会史の連動関係の把握を目的に、研究課題を 3 つ設定する。第 1、移民体験者たちの植民地体験に基づいて、移民体験者たちの移住の要因と定着時の問題点について検証する。第 2、移民体験者たちの戦争体験に基づいて、戦争の記憶のかたちについて考察する。第 3、戦前と戦後を生き抜いた移民体験者たちの生を包括的にとらえる。

第 1 章ではライフヒストリー（生活史）法について紹介した。ライフヒストリー法を用いる理由としては、第 1 に朝鮮人「満州」移民の質的研究はまだ研究の歴史が浅く、先行研究が少ない。第 2 に本研究は移民体験者たちの主観的現実認識に着目しているために量的調査より質的調査が有効である。本研究の当初、一問一答式のインタビューが多く、聞き手の視点の導入を抑制していたが、インタビューの回を重ねるごとに聞き手の筆者も語りに参加していることに気づいた。本研究では実証的アプローチから対話的アプローチへの方法論の転換があり、対話的研究の部分では聞き手も一人称として舞台の中央など、語り手と聞き手の対話が前面に出たりしていた。本論文では移民体験者たちが生きてきた生活世界を知るため、有効と思われる研究方法を試みた。

第 2 章では朝鮮人が「満州」へ移住した要因を考察した。本章は 4 節構成で、第 1 節では朝鮮人移民の移住過程を概観した。第 2 節では文献資料に基づいて朝鮮総督府が朝鮮半島内の過剰人口を「満州」に送り出し、小作争議などの内部矛盾を減らすのを意図した事実を追及した。第 3 節では事例の証言に基づいて移住の要因を 8 つの事例群に分けて検討した。第 4 節では先行研究が取り上げた政治・経済的要因を確認し、各要因について事例の証言と文献資料を突き合わせて検証した。これまでの先行研究では主に農業移民に着目したが、本研究では農業移民以外の状況も検討し、いわゆる「強制連行」や「処女供出」から逃れるために渡満したという証言事例も紹介した。この人たちは一種の亡命移民なので、植民地機関の統計データには反映されていなかった。ライフヒストリー法を用いるこ

とによって、文献資料だけではカバーできない複雑な社会状況を明らかにした。

第3章では移民体験者たちの証言に基づき、理念としての「五族協和」の破綻の要因を探り、朝鮮人「満州」移民の定着時の問題点に言及した。本章では先行研究ではさほど重視してこなかった日常生活の側面に注目し、民族によって乗り物に乗る際の処遇の違い、給料の面での待遇の違いがあった事実を確認した。また「住」に着目して「五族協和」の建前と現実の乖離を検証した。「安全農村」に移住した移民体験者から朝鮮人入植に際し、日本人が元の居住者の中国人を追い出したために中国人から怨みを買ひ、井戸に馬糞が入れられたなどの事実を聞き取った。そして学校教育に着目して「五族協和」の理念と現実の差を追及し、先行研究でも指摘されていた文化統合の実態を確認したのみならず、文化統合を受けた人々の抵抗の語りも紹介した。最後に纏めとして、仮に1945年の日本の敗戦で「満州国」が崩壊しなかったとしても、「五族協和」は実現できなかったに違いないと結んだ。

第4章では移民体験者たちの戦争の記憶のかたちについて考察した。本章は4節構成で、第1節では基本概念としての記憶を説明し、第2節では戦争の記憶を取り上げる意義を述べ、元朝鮮人「従軍慰安婦」や元抗日戦士にインタビューができなかったことを紹介し、トラウマとなっている戦争の記憶を引き出すことの困難の例証とした。第3節では戦争の記憶を「戦前の記憶」と「戦後の記憶」に分け、さらに「戦前の記憶」では「学校生活のなかの戦時色」、「徴兵に関わる戦争の記憶」、「敗戦直後の避難体験」などの分析枠組みを設定して論を進め、移民体験者たちの証言から戦争の愚かさや悲惨さを伝えた。第4節では戦争の記憶が問いかけるものについて総合考察し、民衆の視点から戦争を見つめれば、戦争の悲惨さや愚かしさが伝わると論じた。

第5章では聞き手の筆者が一人称で登場して、移民体験者たちとの世代を超える対話を手がかりに、移民体験者たちの生について考察した。対話を通して浮かび上がったのは、在満朝鮮人の中国人差別である。朝鮮人「満州」移民は日本の植民地統治の「被害者」である反面、中国の民衆には日本人の手先と見なされていた。朝鮮人と日本人との関係に限定してみれば、朝鮮人「満州」移民は「被害者」であるが、朝鮮人と中国人との関係では、朝鮮人「満州」移民は「加害者」の部分もあった。朝鮮人「満州」移民を考える際には「加害者」と「被害者」の問題は避けて通れない。本論文では移民体験者たちとの対話を通して、加害と被害の二元論を超える植民地経験の継承について論じた。また本論文では、対話のなかで移民体験者たちが自分に対する自称詞はチョウセンジンや朝鮮族ではなく、チョソンサラム（朝鮮語による朝鮮人の意味）を用いていること、インタビュー言語が朝鮮語をメイン言語としながら随所に中国語と日本語を織り混ぜて複数の言語で行われたことに注目して対話が結び付けるさまざまな関係性について論じた。

終章では本論文の到達点をまとめ、合わせて本論文の限界と課題に触れた。現在、存命中の移民体験者の多くは80歳を超えており、事実の証言者は年月と共にやがて消えてゆく。本論文は「消えゆく声を聞く」残された数少ない聞き取りの機会を活かした。本論文の貢献としては朝鮮人「満州」移民研究にライフヒストリー法を取り入れたことである。既存の先行研究では主に国策農業移民を取り上げており、そのほかの移住形態についてはさほど注目してこなかった。その1つの原因は統計データ特有の限界に求められるだろう。戦前の各植民地統治機関の統計データはまちまちであった。本論文ではこの統計の範疇からもれた人々の声を拾いあげることができた。